



## 心に刻むこと

企画室長 持田侑宏

間もなく企画室長としての4年の任期を終えようとしています。この4月からの非営利型一般社団法人移行や、倫理綱領類の現行化、Webシステム改革、CEATEC連携などを理事会に提案することができ、関係された皆様の御尽力に感謝致します。更に、昨年3月11日には東日本大震災を経験しました。被災された皆様の痛みや復旧に携わった方々の御苦勞を思いつつ、電子情報通信学会は津田前会長、安田会長の下で様々な対応を致しました。

私が参加した限りでも、4月の東京支部によるシンポジウム「技術者・研究者の視点から大規模災害を考える」、9月のソサイエティ大会での通信ソサイエティをはじめとした多くの講演、10月のCEATECでの特別シンポジウム「災害を乗り越えて 安心・安全でスマートなICT社会構築へ」(各講演のスライドは本会Webに) やスマートグリッドなどの講演会、12月に石巻市で行われたHCGや東北大学による高校生に向けた未来世代復興シンポジウム「創造的復興における情報通信の役割」などがあり、3月の総合大会でも多くの講演がありました。また先月の会誌特集号「東日本大震災からの復興の取組みと震災から得た教訓」では多様な視点からの報告と提案がなされました。

一方私たちの海外の同僚や友人、研究仲間からは震災直後に様々な見舞いの言葉が寄せられたとともに、本会や関連の国際会議での日本からの復旧・復興の貴重な体験の発信に大きな注目が集まり、日本がこの災害を生かして、次世代の電子情報通信システムをどのように構築していくかについて関心が高まっています。

私のフランスの同僚からも、通信インフラのかなりの部分が破壊されても決して全体がダウンしないネットワークとして、東北大学の中沢教授がCEATEC講演の中で述べられたネバーダイネットワークについて関心が示されています。これは、これからの途上国のネットワークでインフラが十分でない場合でも、変動に対して機能が全滅しないネットワークとして応用可能です。

また、被災された方々からの要望である、身に付けているだけで安全性が高まる携帯電話についても、生命を救えるICTシステムとして、ぜひ実現が待たれます。Newsweekの2011年4月16日号に掲載された、「携帯電話の位置情報とともに、助けを求めるメッセージが自動的に一つの地図上にアップロードされ、それが救助の最前線にリアルタイムに伝わるといったことがあればいい。」という期待もありました。

このように災害時に生命を守り安心な社会をつくるICTの技術開発は、決して日本のためだけのガラパゴス的な技術ではなく世界に貢献するものと期待でき、私たちの重要な挑戦テーマとなります。そこにはセンサデバイスからスマートな分散的社会インフラまで、大きな研究領域が広がります。

しかしこの技術開発には長い時間がかかるかもしれませんし、多くの異分野技術のマッシュアップも必要です。これをやり遂げるためには、本会としてこの震災を決して忘れないで心に刻むこと、一歩一歩前進していることを共有すること、それを常に発信し続けることが大切でしょう。そのためにも、会誌10月号で予定されている小特集「人間中心の観点での東日本大震災からの創造的復興」をはじめとしたこれからの企画も意義深いものと思います。